創刊号
2008年11月

甲南大学

広域副専攻
センターだより

- 各コース担当者からのメッセージ
- センターから

創刊の挨拶

広域副専攻は、学部の専門に加えて、さらにもう一つの分野を系統的に学ぶことにより、学生の視野を広げ、多様化した現代社会の環境や価値観に対応できる能力を養うという目的で、1994年に開講されて以来、15年目を迎えました。その間、甲南大学を巡る状況はめまぐるしく変化しており、各学部は、独自の教育目標を掲げ、学生の教育と学部の維持に全力を注いでおります。しかし、そのような折であるからこそ、学部の枠を超えて学ぶことのできる総合大学の良さを改めて見直す必要を感じ、ここに「広域副専攻センターだより」を創刊させていただくことになりました。

このたびの創刊に際しては、多方面の方々にたいへんお世話になり、特に、原稿執筆を快くお引き受けいただいた先生方には、深く感謝いたします。広域副専攻の講義科目は、その多くが、聞いてすぐ何かに役立つというような、即効性のあるものではありませんが、深く心にしみ残る講義を聴くことにより、学ぶことそれ自身のすばらしさを感じていただくことを期待しております。

広域副専攻センター所長　森元勤治

新鮮な講義を目指しています・・・・廣川晶輝（リベラル・アーツコース）

私は、リベラル・アーツコースの「文学」を担当しており、日本文化の粋を集めた和歌世界について講義しています。私自身、文学部日本語日本文学科の准教授であり、『万葉集』の研究を専門としていますが、そんな私が専門的な内容ばかりを講義してよいのかというと、それは許されません。なぜなら、この「文学」の講義は、文学部日本語日本文学科の４年生や理工学部の１年生も受講しているからです。前者の学生に合わせた講義では、後者の学生は困り果てます。後者の学生に合わせれば、前者の学生は退屈です。だから、私は、誰でも新鮮に感じることができる「違った角度からの講義」を心がけています。例えば、現代のアーティストGacktの歌詞を分析したりもします。Gacktの曲に、「君に逢いたくて、誰よりも逢いたくて」というフレーズがあります。ラブソングですから、「君に逢いたい」のは当然ですが、「誰よりも逢いたい」となると、「俺は恵理や光子やリカのこと好きだけど、その中でも君が一番好き！」ということになってしまいます。これは、無くてもよい情報です。「誰よりも会いたくて」というフレーズがあると、そういった雑音が入ってしまうわけです。三十一文字しかない和歌には決して許されない無駄です。こうした内容を聴いた学生は、みんな、「なるほど！」という顔をしてくれます。その顔を見ることができた瞬間が、教員である私にとっても一番嬉しい瞬間です。

歴史とはなにか・・・・・・・・・・・・・安西敏三（人類の歴史コース）

「見聞広く事実に行わたり候を学問と申事に候故。学問は歴史に極まり候事に候」。これは歴史を学び、その意味について考える時、噛み締める豪傑儒者荻生徂徠の言葉である。その前には「此国に居て。見ぬ異国之事をも承候は。耳に翼出来て飛行候ごとく。今之世に生れて。数千載の昔之事を今目にみるごとく存候事は。長き目なりと申事に候」とあり、その後に「古今和漢へ通じ不申候へば。此国今世の風俗之内より目を見出し居候事にて。誠に井の内の蛙に候」とある。

内外を問わず、過去を恰も今見るが如きする体験は、学問の真髄ともいうべき長期的展望を持つことに通じ、そうでない場合は今此処の世界のみを見る視野狭き無学な人となる。学問は歴史を以て代表されると徂徠が確言した所以である。翻って現在の学問の進歩は凄まじいものがある。しかも専門化と国際化が著しく、今時「見聞広く」ではない状況である。しかし大学教育の大学教育たる所以は専門学校とは異なり、にも拘らず「見聞広く」が要求されよう。英国の思想家Ｊ．Ｓ．ミルが哲学的法律家とか哲学的医師と哲学的との形容を専門職に付したのも、その意味で頷けよう。人間を育てると本学園の創設者平生釟三郎は謳ったが、それは専門知識と共に幅広い教養を備えて始めて人間の顔を持った世界に通用する人材が育つことを期待したものであり、この点ミルなり徂徠なりに通じる。そして今それを可能とするのは本学にあっては広域副専攻であり、その役割と存在理由も正にそこにあると思いつつ、私は政治史を担当している。

「良質の睡眠」・「規則正しい生活」がQOLを向上させる・・前田多章（情報コース）

この講義（生体情報）では、生体における睡眠と健康の側面から、生体情報処理を理解することを目的としています。本講義のテーマは、受講生にはあまり馴染みが無い様に思えるかもしれません。しかし、受講生の誰もが、脳や身体を有し、生体情報処理によって、生命が維持されています。さらに、毎日当然のように繰り返している睡眠が、生体情報処理の制御に強く作用し、健康維持を実現しています。

生体情報処理の理解を通して、自身を一個の生命維持装置であることを感じ、さらに、睡眠-活動という日常生活のリズムが健康と密接に関係していることを感じて欲しいと思います。そして、クオリティー・オブ・ライフ（QOL）の向上に『良質の睡眠』と『規則正しい生活』が非常に重要であるということを実感して、これからの生活に役立てて欲しいと期待します。　そして、この講義が、受講生諸君にとって新たな世界を垣間見る機会であるとともに、将来、自身の専攻している学問（専門分野）に取り入れる、あるいは自身の専攻している学問技術を利用する領域（応用分野）を構想するとても良い機会であれば幸いと思います。

文系と理科・・・・・・・・・・・・・・宇都宮弘章（国際関係コース）

広域副専攻で文系の学生に理科を教える上で思い出すのは、立花隆がかつて言った次のような言葉である。「私学文系の学生はひょっとすると最後に理科を勉強したのは中学生のときかもしれない。そしてこれからの人生で理科を勉強するのは大学が最後の機会になるかもしれない。」

ジャーナリストである立花は、現在ではその活動に賛否両論あるようだが、文系出身者でかつて脳科学や宇宙科学を扱ってマルチタレントぶりを発揮し「知の巨人」と呼ばれた人物である。先の言葉は、広域副専攻科目「物理学と国際化」で、たいていは難しくてわからないと敬遠される物理を文系の学生に教える上で、私には大きな救いになった。

人生は皮肉なもので、自分は文系あるいは理系一筋という理由でこれまで避けてきたことに、その後の人生では正面から向き合わねばならないことがある。それは人が生きていく舞台である社会は、文系と理系が融合した存在であるから当然なのだろう。その時々で、この講義で学んだこと聞きかじったことが、なにがしかの役に立てば、私にとって幸いである。

私の講義に含まれる核をめぐる国際情勢は、担当の半期の間でもリアルタイムで進行する。今日（2008年9月15日）付けの新聞では核不拡散条約の枠組みを壊すインドとの原子力協力条約の締結が報じられた。来年の講義では、このようにリアルタイムで起こる核をめぐる国際情勢について、学生にレポートを課して嫌われることにしようかなどと考える。

日本経済の「今」を読み解く・・・・・・・青木浩治（現代社会コース）

近頃は年々早くなり、3年生後半になると学生諸君は就職活動を始めなければならなくなります。その頃、企業の求人状況はどうなっているのでしょうか？　誰もが知っているように、それを決めるのが日本の景気動向です。しかし、おそらくほとんどの学生諸君はそれについて詳しいことを知らないのではないでしょうか？　広域副専攻科目の「現代の経済」においてここ数年、私がお話ししてきた内容がまさにこれであり、日本経済の帰趨が「グローバル経済」というイメージし難い次元で決まってきている現実を知って頂くことがその目標でした。

いったいアメリカや欧州の金融不安が日本経済にどのような影響を及ぼし、また、われわれの暮らしとどのように関わっているのかを知りたいものですね。確かに、医療や年金・介護制度、環境問題、教育・子育て、あるいはワーキングプア・地域格差などの直接目に見える社会経済問題にわれわれの耳目・関心が集中するのは自然です。しかしその一方で、直接目で見たり、あるいは直接手で触れて確かめたりすることのできない「社会の相互依存ネットワーク」という、いわば霞のようなものがわれわれの生活に重要な関わりを持っています。そして日本経済の「今」を読み解く鍵の一つが「グローバル経済の中で日本が動いている」という現実の認識であり、実は学生諸君が最もイメージし難い世界なのです。その未知の世界に誘い、少しでも学生の知見を高めることが、現代の経済の目標です。これをきっかけとして経済に対する学生諸君の興味・関心が少しでも開けたらと願っています。

土と生命にふれる環境教育・・・・・・・・谷口文章（環境学コース）

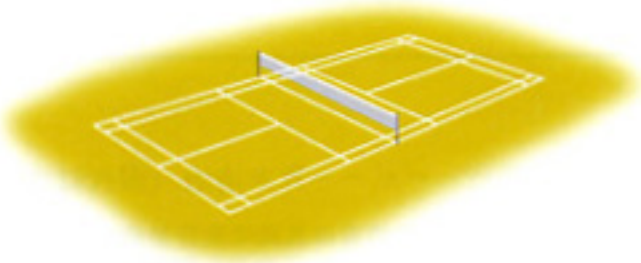
「環境学コース」の17科目のなかでも実践科目として特色があるのは、「環境教育の実践Ⅰ」「環境教育の実践Ⅱ」です。この科目では、教室の講義によって得た「知識」が、フィールドの場で「知恵」として生きたものになることを目指しています。具体的には一年を通じて生命の輝きを体験するために、野菜づくりや米づくりを行なっています。トマト、ナス、ピーマンなどの夏野菜を4月に植えて7月に収穫して、畑で食べるときの旬の「甘い」味は忘れられない経験となります。米づくりでは、籾から苗を育て、暑い中草抜きをし、収穫期には稲刈りや脱穀をして、収穫祭のモチつき大会を最後の授業の中で行ないます。こうして生命と食物に対して感謝の気持ちを自然に身につけていきます。とくに稲刈りを終えたときには、落ち穂拾いをして、稲穂の一本一本を集め一束にして乾す作業は、御飯の一粒一粒の大切さを体験的に知り、残すことなく食べることが習慣になっていきます。

このような「環境教育の実践Ⅰ・Ⅱ」体験学習の魅力は、「生命の輝き」と「自然の素晴らしさ」に触れることにあるのです。

スポーツの行方を考えるために・・・・鮎木千加子（健康科学コース）

オリンピックイヤーの2008年、テレビに釘付けの夏を過ごした人も多いのではないでしょうか。1896年にはじまった近代オリンピックは、20世紀という時代の間に、素朴な見せ物に過ぎなかった大会から、競争原理、経済原則、メディアの論理などを栄養として巨大なスポーツイベントになり、スポーツの中心に君臨しようとしています。では、これからのスポーツの行方はどのようになるのでしょうか。私達の生きる社会にとって、スポーツとはいったい何なのでしょうか。また、一人ひとりの生きる人間にとって、スポーツとは何なのでしょうか。

スポーツの行方は、それを取り巻く多くの要因により決定されていきます。その元にあるのは、「スポーツとは何か」ということであり、関わる人間の考え方により行方が決まるのです。スポーツの行方に影響を与えるのは、スポーツの専門家だけではありません。一人ひとりのスポーツ観が豊な程、スポーツの行方はよい方向を向くのではないでしょうか。そういった願いを込めて、様々な専門分野の人がスポーツ文化を考える機会として、「スポーツ文化論」の授業に取り組んでいます。



広域副専攻センターから

甲南大学の全学共通教育として、広域副専攻が開講されていることは、皆さんよくご存じであり、広域副専攻カリキュラムは、広域副専攻センターを中心として運営されています。しかし、このセンターの存在はあまり知られていないようで、スタッフとしては寂しい限りです。センターは、６号館３階に事務室を置き、学生諸君が支障なく勉学に取り組むことができるよう、改善努力を続けています。

例えば、広域副専攻のカリキュラムは７つのコースから構成されており、学生諸君は自分の希望や専門科目とのバランス等を考慮して、１つのコースを選択し登録する必要がありますが、そのコース選択が円滑に行われるよう、毎年秋にコース登録説明会を開催しております。下の写真は、そのときの様子ですが、熱心に説明をする先生と、真剣に聞く学生の姿が心を捉えます。

このたび、広域副専攻の充実とセンターの発展を願って、センターだよりを創刊いたしました。みなさまのご意見に耳を傾け、ますます充実発展させていく所存でございますので、今後ともご協力よろしくお願い申し上げます。

コース登録説明会の風景（1）

コース登録説明会の風景（2）

発行　甲南大学広域副専攻センター
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1　6号館3階
TEL 078-435-2749